

私は今回の国内研修に岐阜県の飛騨高山および白川郷を選んだ。

高山は、指定文化財である飛騨国分寺や、国の重要伝統的建造物群保存地域に指定されているさんまち通りのような歴史ある建物や通り、飛騨牛や高山ラーメンなどのグルメスポットなど観光地として有名である。そして飛騨高山の白川郷は、1995年12月9日ユネスコの世界遺産（文化遺産）として、合掌造り集落が登録されている。

合掌造りとは、梁の上で、まるで掌を合わせたように山形に木材を組み合わせて建築された、傾斜の急な茅葺きの屋根を特徴とする住居のことである。この構造には2つの主な目的がある。一つ目の目的は、白川郷の季節の特徴である豪雪においての、雪下ろしの作業軽減。二つ目の目的は、幕末から昭和初期にかけての基盤産業であった養蚕業において使用する屋根裏の床面積拡大である。この種の形状の住居は日本の他の地域には無いもので、白川郷の他には五箇山地方にしか見られない特色のある民家の形式である。

合掌造り家屋は、もともと多く建てられていなかったが、特に戦後の経済発展と近代化の流れにより、その数は激減、現在ではたったの150棟以下となってしまった。

白川郷でも、戦後のダム建設ブームにより、多くの合掌造り集落は姿をなくし、昭和40年代の高度経済成長期には合掌造り家屋が村外に売却されたり利便性を優先した近代的家屋に立て替えられたりした。

このような時代の潮流に対して、白川郷は昭和42年廃屋になった合掌造り家屋をから移築保存を開始し、昭和47年からは「白川郷合掌村」として公開してきた。この背景には、荻町住民が昭和46年、融資で白川郷荻町集落の自然環境を守る会を結成し、警官と合掌造り家屋の保存のため「売らない、貸さない、こわさない」という住民憲章を制定し、茅葺屋根の葺き替えに補助金を出したり、民家の外観を壊す改装は行わないようにしたという努力がある。

それらの努力の結果平成7年、とうとう白川郷はユネスコ世界文化遺産として登録された。

登録後も並々ならぬ努力は続き、30年に1度、白川郷は200人以上の地域の人々とボランティアの手によって、屋根の交換を行い、景観維持に努めている。

世界遺産登録後は人口約1900人の集落に年間100万人を越える観光客が押し寄せるようになり、平成20年には東海北陸自動車道が全線開通した。

かつて「陸の孤島」と呼ばれるほどに閉鎖的であった白川郷は、大きく姿を変えたが、それでも、現在も一番近い高山駅からですら、バスで50分以上かけなければいけない。

私は国内研修をするにあたって、以下の二点に焦点を絞って研修先を回ることにした。

第一に住民の苦悩を知ることである。観光地として知られる高山と白川郷は増加していく観光客と比例して、悪化していくマナーの問題や急増するトラブルが存在する。今回の研修で私はそれらの問題の実態と、対策としてどのような努力をしているのか把握したいと考えた。

第二に住民の生活風景を実際にこの目で見て体感することである。

私はまず高山はただ観光地であるだけでなく、多くの地元民が居住する住宅街でもある。私は、さんまち通りや宮川沿いと高山陣屋で開かれる朝市に行くことで地元民と実際に関わりたいと考えた。

次に、白川郷では世界遺産の中でも非常に珍しいことに、現在も住民がナラやブナのような広葉樹林や堅実類といった自然を利用して生活をしている。私は白川郷に向かうことで自給自足の暮らしを体感すべく、合掌造り民家園の渡辺さんにお願ひし、蕎麦の実を使った、伝統の蕎麦打ちを体験することにした。

初日、まず私は高山駅へ向かう電車の中で強く印象を持ったのが、外国人の多さである。車内の約8割が外国人で埋まっており、日本人は非常に少ない。地元民によると、これに合わせて、数年前から高山駅には電柱広告にも英文を使用されたものが増加し、かつては地元の長居する子連れをターゲットとしていた店も駅周辺に移り外国人観光客をメイン層とした店へと変貌しているようだ。それにより高山では、言語の壁が生じており、大きな弊害となっているようだった。

高山駅周辺は、車のよく通る大通り沿いには観光客向けの店が並んでおり非常ににぎやかだが、反対に、一本道を逸れた通りは閑静な住宅街となっている、後述のさんまち通りの地元の方が教えてくださったが、こうすることで騒音の問題を防いだり、地元住民のプライバシーを守ったりしているようだ。

また、交差点の歩道と車道の境目では、段差を無くす事でバリアフリーの努力をしているようだ。さらに、道路横断側溝は幅を小さくすることで、車いすの車輪がひっかかないように配慮をしているらしい。

バリアフリーに関しては他にも多くの努力をしているようで、例えば、市街地のトイレに車いす用のトイレを設ける、車いすに乗る方でも利用可能な大型タクシーを低価格で運行する、など多くのサービスを行っている。

ホテルに荷物を置いてから後、私はさんまち通りへ向かった。さんまち通りは古い町並みを魅力として持つ、高山でも有名な観光スポットの一つであり、飲食店や伝統工芸の店が建ち並んでいる。さんまち通りにある店を代表として高山の観光客向けのお店では、大半が商品名を日本語と英語の2種類を書いている。近年ではアジアの観光客も増えてきたようで、中国語を加える店も多いようだ。

私が問題点として強い印象を受けたのは、信号の時間的な長さである。

東京と比較して、歩道は待ち時間が長く、渡れる時間は非常に短い。そのためか、信号無視をする人が多く見られる。高山駅前では、車通りの多い交差点にも関わらず、信号が無いという光景まで見られた。

もちろん、都心部と比較して、車のスピードは緩やかで、歩道で横断待ちの人がいると大多数の車は止まってくれる。しかし、車椅子の人を始めとして事故のリスクは高いだろう。改善が必要であるように感じた。

二日目、私は早朝から濃飛バスを使用して白川郷へ向かった。

白川郷に到着してすぐ、私は合掌造り民家園に行き、事前に渡辺さんをお願いしていた蕎麦打ち体験をさせていただいた。

石臼でソバの実を挽いて作った蕎麦粉を使用して作る。作る時は畳の上で膝立ちになりながら行った。今回は庭に植えてあるもちきびの収穫も特別に手伝わせていただいた。これは米代わりの食糧になるそうだ。

家の構造上、クーラーも扇風機も必要ないらしく、確かに8月の中旬でありながら民家の中は過ごしやすい気温になっている。一方で越冬に対しては厳しいらしく、既に冬に向けての豪雪対策を始めているようで、家の外には雪対策の衝立を立てかけていた。

近隣住民同士の関わりが強く、農作物などを互いに渡しあっており、都会人が忘れている相互の助け合いの心が端々から見て取れる。

また、合掌造り民家園ではガスを使用してるが家によっては薪を使用して火を起こす人もいるそうだ。ここにも現代にはない昔ながらの生活が感じられる。

私は世界遺産としての悩みについて渡辺さんから重点的にお話を伺った。

世界遺産登録の結果、観光客は増加したがその一方で村は観光地として姿を変え、住民は田畑を埋め立てて観光客向けの道路を建設し、そこに土産物屋を建て多くの収入を得た。

しかし、その恩恵を受けたのは店の経営者のみで観光道路から少し離れた家では昔とはなんら変わらない生活を送っている。商売に明け暮れる住民たちは農業を放棄してしまい、多くの田畑が放置され荒れ果てている。

昔からの伝統的な生活を魅力として盛んになったはずの白川郷は、現実ではそのような昔ながらの生活を送る人はそう多くなってしまったそうだ。

果たして白川郷は観光地としての質を高めているのか、低めているのか、その答えは地元民の目線で白川郷を見ると、非常に出し辛いものとなっていた。

さて三日目、帰路につく前に私は早起きをして宮川通りの朝市を見に行った。朝市で売られるものは観光客向けの伝統工芸品のほかに、リンゴなどの農産物も多く売られている。育てた農産物の中でも商品としては売れなさそうなものは地元民同士で安く売買するために朝市に持っていくそうだ。飛騨高山では他にもフリーマーケットなどを様々な場所で開催し、地元民の安価な買い物を可能にしているそうだ。

この三日間国内研修を行い、私が非常に感じたのが地元民の繋がりの強さである。生活面においても経済面においても地元民は相互の助け合いによって自活を可能にしていた。

しかし一方で観光客向けの場所として地元の繋がりを薄くして、飲食店や伝統工芸店へ姿を変え、利益を得ている人も増えていた。

今高山と白川郷は観光地としてのクオリティを重視するか、地元の住みやすさのクオリティを重視するかの天秤に掛けられ、揺れているといえるだろう。